名),「聞いたことがない」1.0%（2名）であった.

②施設で望むＣＥＮの分野は,「救急看護」56.3%（107名),「感染管理」49.4%（94名),「糖尿病看護」47.3%（90名),「ＷＯＣ看護」44.2%（84名),「重症集中ケア」33%（63名),「がん性疼痛看護」32.6%（62名),「ホスピス」31.0%（59名）などであった.

③ＣＥＮ教育中受ける処遇は,「研修として」23.6%（45名),「退職して」17.9%（34名),「わからない」57.3%（109名）であった.

④ＣＥＮ教育後の期待は,「活動の場の配慮」87.3%（166名),「特定領域の勤務」41.5%（79名）であった.

⑤ＣＥＮ教育を受けるとき支障になると思われることの自由記載を表２に示す.

表２　看護師　記述回答59名　（名）

①　家庭との両立ができない ・子どもが小さい ・家族の支援が得られない ・家をあけられない	59
②　給与の保証がない	55
③　職場の扱い ・退職しないと受けられない ・研修中の身分保障がされない ・職場復帰できる保証がない	49
④　勤務の都合 ・スタッフに負担がかかる ・スタッフの理解が得られない ・自分が研修にでられるだけの人数に余裕がない	48
③　研修の費用	35
⑤　研修後の保証がない ・職場の協力体制ができるのか ・再就職に有利な保証がない	17
⑥　その他 ・自分の能力がついてゆかない ・年齢的なもの ・特定分野３年未満で対象外	 13 10 3

Ｖ．考察

今回の調査から看護師は，何らかの専門性とその教育を望んでいることが分かった.しかし，研修を受けるには，人員数や施設の処遇（給与や職場の保証など）に不安を持っていた.これは,前例として青森県下で長期研修がほとんど無かったためと推測される.今後,看護管理者は，看護師の専門的な卒後教育を施設側としてどう捉え支援するか，看護師は専門的教育を個人の生活とどう相容れていくかを考える必要がある.

また，看護管理者，看護師双方ともにＣＥＮについて「知っている・聞いたことがある」と回答をしたが，自分の施設ではどのように支援できるかについては，基盤がないとも答えていた.そのため,ＣＥＮを支援するためにもＣＥＮ活動と組織的支援の実際などについて知る機会が必要であり，このようなモデルを知ることで青森でのＣＥＮ活用促進が図れるのではないかと考える.

＊　この調査研究は，健康科学教育センター「看護職員専門研修事業に関するプロジェクト」のアンケート調査として行った結果の一部である.

ポスターＰ－９

理学療法過程を習熟させるための学内演習の効果

岩月　宏泰[1)]　藤田智香子[1)]　佐藤　秀一[1)]
佐藤　秀紀[1)]　鈴木　孝夫[1)]
1）青森県立保健大学

Key Words：①理学療法　②教育方法　③学内演習

Ｉ．緒言

本学の理学療法学科の旧カリキュラムでは２年次後期に臨床評価実習が終了すると３年次後期の初期総合臨床実習まで約１年間,学生は学内で学業に励むこととなる.しかし,３年次生の多くは夏休み明けあたりから単身で６週間にわたって臨床指導者の下でなされる初期総合臨床実習について不安を抱いているように見受けられる.この学外実習では症例を受け持ち，理学療法評価－治療といった一連の過程について体験するのであるが，この過程の中で問診や動作分析は全ての有疾者に対して行う基本的な理学療法技術である．学内において学生にこれらの技術の意義，理論，手順などを教授し，健常者を対象とした反復練習させても臨床実習場面では苦慮する学生は多いため，より効果的な演習プログラムを開発する必要があった.

我々は2002年度より初期総合臨床実習に行く直前の３年次生を対象に「問診技術」および「動作分析技術」の再確認を促す目的で学内演習を実施してきた．この学内演習の意義については受講した学生の多くから概ね肯定的な意見を聴いている.

そこで，今回，我々が過去２年間実施してきた学内演習プログラムの紹介とその教育効果について報告する.

Ⅲ．方法

対象は本学科３年次生であり，2002年度18名，2003年

度23名であった．予め電子メイルによる案内及び授業中に学内演習の目的と計画を説明した．また，当日参加した者に「研究対象者となられる学生の皆さんへ」に手渡し同意の得られた者にのみ演習を実施した．演習内容を以下に示したが，対象者には演習終了後そこで学べた事項についてアンケート調査を実施し，ＫＪ法により分析した．なお，演習は2002年度及び2003年度とも各々３回実施した．

1）問診技術の向上を目指した演習：問診技術を学習させるために，治療者側と患者側の両方の立場でロールプレイを行わせた．

2）紙上模擬患者を使用しての動作分析学習および予測技術向上を目指した演習：予め紙上模擬患者・リハビリテーション処方例について数件用意し，連続写真からの動作分析及び疾患，障害について予後予測をたてさせた後に，その内容についてグループで討議させた．

Ⅲ．結果と考察

1．問診技術に関する演習結果

1）患者役から学んだこと

学生の感想を自由記述させＫＪ法により分類した結果，「問診についての不快感と戸惑い」と「問診票から情報収集することの困難さ」の２つに大別された．

2）理学療法士役から学んだこと

学生の感想を自由記述させＫＪ法により分類した結果，「問診の難しさについての学び」と「不安事・心配事に関して聴取することの難しさ」の２つに大別された．

2．動作分析技術に関する演習結果について

本演習終了後のアンケート結果では，対象者のうち約８割が動作分析の基礎知識は復習できたと回答したが，技術の確認が出来た者は約半数，演習全体を通じての理解は約８割であった．また，9割近い対象者がこの演習の意義を認めていた．なお自由記述には，演習からの学びや自己分析，不安などが書かれていた．これらの結果から問診の演習同様，この演習も動作分析方法の再確認と自己分析を促す機会にはなったと考えられる．

3．紙上患者による理学療法過程の演習結果について

本演習終了後のアンケート結果は，概ね良好であった．約８割が知識の復習ができたと回答し，ほぼ全員がこの演習の意義を認めていた．自由記述には，理学療法過程に関して復習ができたがむずかしい点もあること，対象者のイメージが浮かびにくいことが挙げられた．これらから問診や動作分析の演習結果と同様，理学療法過程の再確認と自己分析を促すよい機会になったと考えられる．

4．今後の課題

現３年生も旧カリキュラムが適応されるため，本研究の対象者と同様に前回の学外実習から初期総合実習に出る前に１年間の空白が生じる．そのため，2002年度から試みている本演習の継続は必要不可欠である．今年度は本学科教員の協力を得ながら，新たに作成した映像教材を用いた学内演習を行うことで初期総合実習の導入を円滑に図りたいと考えている．

Ⅳ．文献

岩月宏泰，藤田智香子：理学療法学生に動作分析技術を習熟させるための学内演習プログラムについて．日本公衛誌（特別附録），50：260，2003.

ポスターＰ－10

A contribution of autopsies to understanding dementia in presenile-senile period

Noriaki Yoshimura, M.D.[1)]

1）Aomori University of Health and Welfare

Key words：Alzheimer disease, Down syndrome in middle age, Pick disease, ALS with frontotemporal dementia, Parkinson disease, Myotonic dystrophy

Ⅰ．Introduction

The population of old people (over age 65) of our country is about 22.5 million at present. It is predicted that it will be 34.5 million in 2020, and the about 7% (2.40 million) of which will be patients with dementia. Each 40% of them will be patients with Alzheimer disease (AD) and those with cerebrovascular dementia. The remainder 20% will consist of patients with other type dementia.

AD is characterized histologically by the presence of neurofibrillary tangles (NFTs) and senile plaques, and marked brain atrophy takes place by falling-off of nerve cells. Sooner or later, patients develop advanced dementia, decay of personality, and apallic syndrome including akinetic-mute bed-ridden state. Although many families with gene mutations have been reported, most patients with AD are sporadic in occurrence. In